

今回はここに注目

オープンキャンパス指導

となりの学校の進路指導

file.6：常総学院高校（茨城・私立）

「体験」で終わらせない前後指導で 進路目標への意欲を高める

早期から大学に足を運び
家庭で将来について話す契機に

大多数の生徒が大学進学を目指す常総学院高校。普通科のなかに3つのコースがあり、各コースの学年団が生徒の目標等に応じた進路指導を行っている。今回は、今年度の中高一貫コース2学年団（3クラス）が実施してきた、オープンキャンパスを効果的に活用した進路指導の取組について、同学年主任・塚田恵美先生に聞いた。

内部進学者を対象とする中高一貫コースでは、6年間を3つのチームに分けており、第2チーム（中3・高1）は将来に向けた意識づけをテーマとし、キャリアガイダンスや適性検査、入試制度ワークショップなど、さまざまな指導を行っている。

なかでも大学等のオープンキャンパスは「インターネットではわからないことが体験できる」として重要視。中3では、夏休みに「憧れの大学のオープンキャンパスに保護者と参加することを促した（図1）。

「各家庭で『どんな大学生になりたいか／なつてほしいか』『大学の先にどんな将来があるか』などについて会話するきっかけになればと考え、保護者会でもご協力を呼びかけました」（塚田先生、以下同）

オープンキャンパス参加を 三者面談で宣言

高1は、次年度の文理選択に向けて進路の方向性を定めていく時期だ。1学期には、生徒一人ひとりが現状を振り返り、将来の目標やその実現に向けてやることの決意



夏休み明けのオープンキャンパス報告会の様子。

などをまとめた発表資料を作成した（図2）。学校側が指定するフォーマットに沿って、オープンキャンパス参加予定も記載。その資料を用い、各生徒は夏休み初めの三者面談でプレゼンテーションを行った。

「直近の予定であるオープンキャンパスの話題を糸口に、進路に対する生徒の考えを引き出し、三者で共有しました」

高1段階では、目標校をその時点の学力に合わせるのではなく、「行きたい」という気持ちを重視している。オープンキャンパスについても、「行きたい大学に、友達と一緒に参加することを奨励した。

「この時期のオープンキャンパス参加の一番のねらいは、目標への意欲を喚起すること。友達と楽しく訪問し、共に高みを目指そうという意欲につながってほしいと考えました。また、友達の行きたい大学も含めた複数校への参加につながり、思いがけない発見や視野の広がりが期待されます」

もっと
教えて！

進路指導のあれこれ

Q 学校全体の 進路指導の特徴は？



A コロナ禍が「学校教育とは何か」について改めて考えるきっかけとなり、これからの時代に活躍する人材の育成を目指して教育活動全体の見直しを図りました。現在、生徒の主体性や内省力の育成に力を入れています。そのなかで進路指導についても、なぜ大学進学するのかという目的を大切に、探究的な学びのなかでキャリアを考えることに重きを置いています。大学の難易度にかかわらず、生徒一人ひとりのウェルビーイングにつながる進路実現に向けて、保護者の方とも連携して支援していく方針です。（進路指導部長・谷川義宣先生）

Q 大規模校の良さを 活かした進路学習は？



A 本校には各学年約6000人の生徒がいますが、人間関係はクラス周辺からあまり広がらない傾向があります。そこで昨年度の3学年から、コースを横断した4〜5人のグループをつくり、志望理由の共有や面接練習などを行ってお互いに学び合うという取組を始めました。甲子園を目指す生徒と東大を目指す生徒など、普段は接点のない生徒同士で活発にディスカッションすることができ、視野を広げる貴重な時間になっています。（谷川先生）

図2 三者面談の発表資料の作成例



図1 オープンキャンパスチェックシート

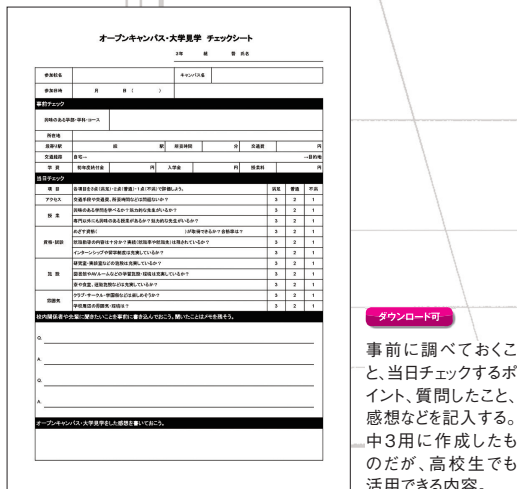


図3 オープンキャンパスレポートの作成例



夏休み明けの報告会で見たこと・感じたことを共有

オープンキャンパスの経験を他者と共有するため、夏休み明けにオープンキャンパス報告会を開催。「いつどこに誰と行ったか」「その大学の特色」「学んだこと考えたこと」「実際にやってみたいわかったこと」を簡潔にまとめたレポートを持ち寄り、5〜6人のグループを組んで1人あたり数分ずつ発表および質疑応答を行った(図3)。

「グループ分けはあえて無作為に行い、希望分野や進路決定状況が異なる生徒が混在する状況を設定。多様な視点や考え方に触れられるようにしました」

報告会の振り返りコメントを見ると、ほかの生徒の発表を聞いて「それぞれ目的をもってオープンキャンパスに行っていた」「入

学後にどんな大学生活を送れるか想像しながら見学したという話が参考になった」などの刺激を受け、参加校以外の大学にも興味が高まっている様子が見えてくる。

高2となった今年度の夏休みは、受験可能な性の高い大学のオープンキャンパスに2回以上の参加を勧め、休み明けにはまた報告会を実施する予定だ。

「今年度は授業体験や在学生との懇談などに参加し、大学生活に対してより具体的なイメージをもつことが目標。報告会でも体験を中心に発表してもらった予定です」

こうした良い実践をほかの学年団が参考にし、新しい取組につなげる動きがある。現在、中高で連携し、上級生が下級生にオープンキャンパスに同行しながら、生徒間で大学の見方や進路意識を引き継ぐ仕組みづくりも検討しているという。

報告会后、グループの発表から学んだことを言語化し、内面化を図る。

進路指導に関わる先生方



進路指導部と中高一貫コース2学年団の先生方。AIを活用し校務負担が軽減されたことから、今年度は進路指導部の人数を減らし10人体制で運営している。

School Data : 1983年設立 / 普通科(特進選抜コース・進学選抜コース・中高一貫コース) / 生徒数1,702人(男子892人・女子810人) / 進路状況(2026年3月卒業生)大学405人・専門学校等22人・就職2人・その他50人

す。(塚田先生)



Q 発表やディスカッションが活発になる理由は?

A 担当の学年団では、中学入学時から学びの言語化や発表の機会を多く設定し、「どんな意見も尊重しよう」「グッドリスナーであることでグッドスピーカーになれる」などと伝え、相手の話を聴く姿勢を大切にしてきました。回数を重ねるなかで、人前で発表することに自信を高める生徒もいます。そうした土台があったので、オープンキャンパス発表会でも大きな拍手が起るなどの盛り上がりにつながったと考えています。